月渕恒子考
—尺八の科学的研究所の道を拓いた人—

志村 哲

さて、本稿は、そのような先生のご経歴や本学でのご活躍を記そうとするものではなく、先生のもうひとつの顔である学者としての歩みを考察することを目的としています。そこで、先生の主要業績を文末に例挙してみましょう。それに、その約九割が尺八に関するものでした。そして、その「前半」の集大成は、1999年に大阪大学大学院文学研究科に提出された博士（文学）学位請求論文「尺八古典本曲の研究」（その公刊本は『尺八古典本曲の研究』（出版芸術社）（写真2））でした。

写真1. 最後のフィールドワーク。一顔切・暗詠法流尺八研究家、相良保之・と紀伊由良・興国寺・不動会の日、本堂と虚銅壷で対談。（平成22年5月3日）摄影：志村哲

本学音楽学科元教授・月渕恒子先生は、平成22年9月23日にご逝去されました。先生は、昭和47年に本学に着任され、他界されるその日まで、40年近くにわたって、大学の発展に尽力され、また我々を指導してくださいました。昭和19年のお生まれですから、まだ、やられされたことがたくさんおありであったであろうと考えますし、何よりも学内外の多くの方々が残念な思いのなかでお別れをしなければなりません。
ところで、こんにちは尺八は、日本楽器のなかでも特に国際的に行きが進み、外国人の専門演奏家が多い楽器であり、また、尺八をテーマにした研究で博士の学位を持つ人数も圧倒的に欧米人が多いという不思議な現象が起こっている。その理由のひとつは、尺八古典本伝は仏教禅宗の一派である音楽伝は僧・虚無僧の尺八音楽であるということで、西洋人が20世紀に高く評価した日本の伝統文化の思想や精神性が音楽によって実践的に具現されているということ、そしてもうひとつは、西洋のフルートやリコーダが両手の10本の指でも押さえられないほど指孔を増やして発展してきたのに対し、尺八は未だに5つの孔だけで、西洋の笛にはまったく模倣が不可能な演奏表現の技術を極めていることであると考えられます。そこで彼らは、実際に日本に滞在し、なかには禅寺で修行の体験をつなげから尺八の実技、研究に没頭するといった真摯な態度で臨んでいます。そして、彼らのほとんどが何らかの形で月瀬先生のもとを訪れています。あるいは、先生の主宰された尺八研究会のメンバーや大学院研究員として本学で学び、海外の大学で学位を取得した人（たとえば、Riley Lee博士やKiku Day博士など）もおられ、尺八研究者の間では、本学は「尺八研究の世界の中心地」として認知されてきました。これは、取りも直さず、先生の誰にも分け隔てなく、親しんじて学問の指導をされるお人柄と、膨大な知識、見識をおもちになっていたところにあると思われます。

一方、私は、本学に籍をおかせていただいた昭和49年より、月瀬先生にご指導いただき、他にも尺八独奏曲屈指の名曲《竹笛五箏》を作曲された諸井誠先生、邦楽実技で尺八を教えておられた竹保流尺八開祖・酒井竹翁先生に学んだ話、徐々に尺八の世界にのめり込んで行きました。光栄なことに、先生には、ある時には研究助手として、またある時には共同研究者として、いつかの論文の共著者にしていただけました。そこで、本稿はこの尺八研究者としての先生の業績の一端を解説することになります。

なお、他に本学と関わりのあるご業績として重要なものは、中国の音楽学院との交流から生まれた成果として「うたう中国少数民族の過去と現在」『音をかたちへ～ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』（中島貞夫（監）、月瀬恒子・山口修（編）、共著）（龍騏書房）（写真3）のふたつがありますが、これらについては私は略せる力がありませんので、他の機会に、ご関係のある先生方に解説していただければ幸いです。さらに、本学は、いくつかの大学で採用されている教科書として日本音楽の歴史・理論・文化に関する教科書として、近著に「日本音楽との出会い～日本音楽の歴史と理論」（東京堂出版）（写真4）や「現代日本社会における音楽」（月瀬恒子・北川純子・小塩さとみ（編）、共著）（放送大学教育振興会）がありますが、これからにつきましても、ここでは触れませんので、ぜひ現物を手に取ってお読みいただきたく思います。

写真3 中島貞夫（監）、月瀬恒子・山口修（編）「音をかたちへ～ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化」（龍騏書房）
ところで、おそらく先生が最初に公にされた論文は、「尺八古典本曲の研究 - 構成法について」『音楽学』第15巻（一）、音楽学会、（1969）だと思いませんが、これは、前年度に東京藝術大学音楽研究所音楽学課程職業論文（修士）として提出されたものです。先生のあるとき「大学でのゼミを選ぶときに、はじめは柴田南雄先生のゼミで現代音楽の研究がしたかったけれども、先述の諸井誠先生の尺八曲誕生に関わったご縁から、小泉文夫先生のゼミに配属され、尺八研究をする目になった」と何度か言っておられました。これが、良かったということなのか、残念だったということなのか、今となっては、直接お聞きすることはできませんが、私はいつも「良かった」とおっしゃっておられると勝手に解釈しております。「破目になった」という表現は、若干の照れかご謙遜があってのことではなく、実はこのことは卒業論文ですでに「尺八古典本曲」をテーマにされた後、自分の意思で修士論文のテーマへと発展させておられたことからも理解できます。

ところで、ご研究の中身の詳細につきましてはぜひ原著を参照していただきたいのですが、先生のよく語っておられた信念は、今もなお150曲が伝承されている尺八古典本曲は、ほとんどが作曲者の無い楽曲であり、かつ歴史的に多様に変化しながら伝播して、同名曲であっても様々な旋律や奏法が変化した異曲が存在するが、これが未だ混同としたものなのでなく「人間が極めてきたものだから、必ずなにか音楽性を解き明かす原則が見つけるはずだ」というものでした。そこで、まず、先生は西洋文化とは無縁でカタカナの覚書きのような楽譜しか存在しなかった古典本曲を、片っ端から西洋音楽で一般的に用いられている五線譜へ採譜することにより、構成原理をつかむことに成功されました。ただし、この作業は、今もなお、多くの問題をはらむこととして議論され続けています。その問題の大前提は、西洋の五線譜が情報を量で表せるのに対し、尺八ほか日本楽器の楽譜の記述方法が、ຮ孔の押さえ方や音色など、情報の質が中心となっているところから、記譜者ごと、あるいは演奏様式ごとに差しき方が異なるところにあります。つまり変換の方法の正当性が問われます。しかし、この先生の採られた研究過程は、演奏結果である音響現象を、ひとつの方向から音を当てて、先生のすぐれたフィルタを通した像から観察するということと、様々なに色づけられた複雑な音楽の体を、一旦、X線透視図のように断骨にして、その骨組みから分類するという意味で、その後の研究に多くの示唆を与えています。

つぎに先生が重視されたのは、フィールドワークによって、「今に生きる言葉」と文献・楽器などの諸資料から尺八伝承の仕組みや楽曲・奏法の変化の過程を観察することでした（写真1）。その結果、[無定形状態]での多様な楽曲のあり方にこそ楽曲のアイデンティティがあることをつきとめられ、その成果は、前述の博士学位論文に多くの事例と緻密な分析により結論付けられました。

ところで、当初、日本の国立である東京芸術大学であっても、尺八に関する論文は修士はおそらく卒業論文にもひとつ
提出されておりませんでした。さらに、尺八界においても、特に虚無僧尺八の領域は、外から見れば男同士の殺気立った世界にも映る近寄りがたい雰囲気を感じられたようで
す。先生は、「そのようななかに女子学生がひとりで録音機をかついでインタビューにやってきたので、いまではあまり言及されることのなかった情報を惜しむもなく聞かせてもらった。また、たいへん親切に扱われ、資料も自由に拝借でき
った。」と言っておられました。

しかし、その後の先生の尺八研究は、成果が広く知られ価値が高まれば高まるほど、様々な論説が増えられるように
なりました。もっとと、一部には近寄りがたい様相をみせる
虚無僧尺八の世界では、人々によって価値観も主張も異
なり、かつそれは過去にあった文献にも整合性の無い記
述が散見される状態にありましたから、それらを科学的に捉
えることは非常に困難でした。このようなケースの場合、す
べての人が納得する答えは簡単には出せませんでしたし、むしろ
それらの意見は、我々の研究の多角化・学際化とプロジェクト
チームの組織化のきっかけとなりました。

つぎに、見方を変えて21世紀の尺八界から過去を振り
返ってみますと、もうひとつ不思議な現象が起こってい
ます。音楽の長い歴史の中で廃絶していた楽器や音楽
はたくさんありますが、歴史上、登場した数種の尺八のなか
には、今世紀に入ってきた力強く蘇ってきたものが多くあります。
たとえば16世紀後半から17世紀にかけて活躍した一節切尺八とその音楽、そして、江戸時代に発展した前述
の虚無僧尺八は、現在、愛好家が急速に増えてきています。
後者に関しては、もう少し説明が必要なようですが、20世
紀にも愛好家の多かったこの尺八は、明治維新以降の西洋
音楽の流行によって、楽器尺八の構造は、その音楽の様式
でも演奏できるように改造（たとえばフートのような性能を
目指したもの。これを「地塗り尺八」とや「多孔尺八」と呼
ぶ。）されてきましたが、その結果、虚無僧尺八伝承者が使
用してきた江戸時代の楽器構造（こんにちこれを「地無し
尺八」と呼ぶ）や奏法を大きく変えられた楽器に成長してい
きました。ところが、21世紀に入って、この違いが音色や演
奏様式の違いを決定付ける大問題であることが広く知られ
るようになり、もう一度、我が国が日本文化の独自性を再評
価する動きと結びついて、江戸時代の製作方法である「地
無し尺八」の復元およびその発展形の追究が増え始めら
っています。もちろん、20世紀を通じて伝承者の間では経
歴されてきた技術で、音楽界の変化が後継者不足を
呼び、社会的維持が困難なところまできてしまいました。そのよ
うな状況に警鐘を鳴らしてくれたのは、フィールドワーク先
での伝承者・諸先生の言説に加え、熱心な外国人尺八家の
活動であったと思います。そこで、我々は歴史的楽器の現
物、楽譜、文献の収集に加え、録音・録画作業に力を入れて
きました。

また、そのためには、膨大な資料の公表と分析の時間がこ
れからも必要になると考え、資料の収集と研究の国際化に寄
与するためのいくつかのプロジェクトが展開されました。た
とえば、日英二言語で出版された「尺八研究ハンドブックに
てもって-古典本曲研究の過去と現在」(Toward a handbook of
syakuhati study - classical syakuhati honkyoku, the past
and present.)[月野恵子・山口修(共編)、共著(尺八研究会)](写真5)や「尺八の基礎資料収集とデータベース構築の試案-新国内・国際的利用に供するために」[尺八研究会(编)、共
著]平成1〜3年度文部省科学研究費補助研究成果報告書
(研究代表者：月野恵子)(写真6)がそれにあたります。そ
のなかで、私は楽器調査と演奏法の習得・分析および、当時、
我々の手にも入るようになったコンピュータを使ったデータ
ベース化の作業を担当しましたが、ここで得られた知識をノ
ウハウは、その後、設置された本学通信教育部音楽学科の専
門科目「音楽データベース1, 2」、および、芸術学部音楽学科
「音楽データベース演習」と卒業制作関連科目で「IT 社会の
ための情報音楽 Web博物館」(写真7)へと発展しています。

なお本文稿は、巻末にあげたおびただしい数の文献ひとつ
ひとつに言及することはできませんので、最後にもうひととだ
け先生の研究に対する姿勢について記しておきたい思い
思います。私は、先生との長期にわたるフィールドワークの過程
で多くの伝承者から様々な楽器を見ていただき、それらの
演奏上の留意点を学ばせていただくことができました。そのご縁により、今でも続いており、私の研究の基盤になっています。一方、月戸先生は、ほとんど尺八を吹かられません。そこで、尺八家のなかには「尺八を吹かない者に何が分かる？」ということを言われる方もおられました。私は、「演奏されないから分からないこともあると思います」とそれからの問い合わせてきましたが、実際には先生には尺八を稽古する時間は無かったと思います。また、私は、ある大学院生に「志村先生は研究と演奏が両立できているのですね。どうすれば、そんなことができるとですか？」と聞いたことがあります。私は「それは、当分はどちらかを止めることです。」と答えました。私には創作と研究は、相反する行為にしか感じられず、両立は不可能だと思っていたからです。おそらく、人生に与えられた時間が二倍あれば、創作にかける人生と研究にかける時間を二分して、ある程度、人並みのことができるかもしれ
ませんが、それは叶わない望みです。ましてや、人生がいつ
終わるかは誰にも分かりず、かつ一人的研究が理想的な
到達点に届くことは無いはずです。そこで、先生はきっぱり
と「私は演奏しません」と言い切っておられました。今、続
けている研究が大切であれはあるほど、時間は練り気にでき
ず、また、吹いている人と思考回路が違うところに科学的ア
プローチが成り立ったのだと私は考えます。そして、尺八の
音楽学術の研究をその道を拓いた最初の学者が月星先生であ
り、それがあったからこそ、我々、後に続くものが非常にたく
さんの研究テーマを得ることができたわけです。また、その
功績は、平成14年度 第14回小泉丈夫音楽賞において「尺
八研究に対する著としての貢献に対して」という授賞理由で
顕彰されました。

我々、先生に教えを受けた者たちはとりまして、先生の
ご研究テーマは、我々が二倍の時間か人生があったら届かな
いであろうかと想することを務めております。これを、先に進め
るためにはもっと多くのご指導をいただきたかったわけですね
が、告別式のご遺族代表・内野様のご挨拶のなかに、「恒子
は研究はまだ半ば、もっとやりたいことがあったようだ」とあ
り、これは我々への叱咤激励とも取れる忘れてはいけないお
言葉でした。私個人としましては、平成22年9月23日の国
立劇場主催「尺八の会」出演のため、上京する前夜に先生の
病室へお見舞いに伺い、先生に励まされながら演奏に向か
いましたが、演奏本番の数時間後、先生はご逝去されてしま
いました。この時、「尺八本曲について」「尺八の会」国立
劇場 第152回邦楽公演プログラム（日本芸術文化振興会）
（写真8）が、先生の絶筆となりました。また、演奏曲目、高
橋悠治作曲、地無し尺八のための「短」がお見送りする曲に
なってしまいました。そして、この先生とのご生前、最後の
共同研究の成果が、おそらく国立劇場始まって以来、その曲
目に、虚無僧尺八本来の楽器構築で「地無し尺八」が明
記されたプログラムであったことも、「あなたはこれから行きな
さい」という先生のおコンであったと受け留めております。

幸いにして尺八研究の世界の中心地で育てられた我々、
先生の教え子は、その灯が消えないと、各自が与えられた
環境下で前進しているかんなおらないと思っております。
先生が、博士論文には含めず、我々に託されたであろう研究
の「後半」を進めるために。そして、再び、尺八ブーム、日本
文化再生のブームが訪れたときに、新しい情報発信の拠
点となるよう態勢を整えておきたいと考えます。

本稿は、当初、本学芸術研究所より「月星恒子論」を執筆
するよう要請を受け推奨しましたが、私ひとりの力で限られ
た短い間に「論」まで進めてはいけないと感じましたので、
「月星恒子な考」とさせていただきました。今後、ご縁のあった
多く方々が本稿の至らない部分を補って下さることを祈念す
るとともに、その天の一角にでもなるようにと考え、調べられ
る範囲で先生のご著書を以下に掲載させていただきました。
心より、先生のご冥福をお祈りいたします。月星恒子先生、
ありがとうございます。
＜月溪恒子先生 主要業績＞

●単著・編著書
『楽の器』 (共著者) 東京：弘文堂、昭和63年（1988）
『尺八研究ハンドブックにむけてー古典本曲研究の過去と現在』 (Toward a handbook of syakuhatsu study - classical syakuhatsu honkyoku, the past and present.) 『月溪恒子・山口修（共編）、共著』 大阪：尺八研究会、平成2年（1990）

Tradition and its future in music: report of IMS 1990 Osaka. [TOKUMARU Yoshihiko; OHMIYA Makoto; KANAZAWA Masakata; YAMAGUTI Osamu; TUKITANI Tuneko; TAKAMATSU Akiko; SHIMOSAKO Mari (eds.)]. Tōkyō; Ōsaka: Mita Press;平成3年（1991）
『尺八の基礎資料収集とデータベース構築の試案ー国内・国際的利用に供するために』 『尺八研究会』 (共著) 平成1〜3年度文部省科学研究費補助研究成果報告書 (研究者名: 月溪恒子)、平成4年（1992）
『尺八古典曲本研究の記録ー東京：出版芸術社、平成12年 (2000) 『大阪大学文学部文学研究科学費申請論文の公募』
『日本音楽の歴史と理論』 大阪：芸術文化大学通信教育部、平成13年（2001）

『日本音楽の世界への発信』 平成13、14年度 (学校法人) 塚本学園教育研究補助費研究成果報告書、平成15年（2003）
『音をかちへ - ベトナム少数民族の音楽とその記録化』 [中島貞夫 (監)、月溪恒子・山口修 (編)、共著] 京都：醒醐書房、平成18年（2006）
『現代日本社会における音楽』 [月溪恒子・北川純子：小坂さとみ (編)] 東京：放送大学教育振興会、平成20年（2008）
『細部なる響ー人間国宝・月溪恒子の尺八と生活』 [徳丸吉彦 (監)] 『月溪恒子・徳丸吉彦・奏を継ぎぬ』 『仮本书音楽社、平成20年（2008）
『日本音楽との出会い - 日本音楽の世界と理論』 東京：東京堂出版、平成22年（2010）

●論文等 (掲載ページは略省)
『尺八古典本曲の研究ー構成法について』 [音楽学] 第15巻 (一)、音楽学会、昭和44年（1969）
『尺八古典本曲における同名異曲の問題』 [日本音楽とその周辺 (吉川美史先生還暦記念論文集)] [小泉文夫・星昇・山口修 (編)］ 東京：音楽之友社、昭和48年（1973）
『ウガダの生活と音楽』 [森田・川井誠・月溪恒子 (共著)] [音楽 2、大阪芸術大学紀要、昭和48年（1973）
『尺八の諸論ー日本と世界の楽謡ー楽謡の世界3) [小泉文夫 (監)]、NHK交響楽団 (編)］ 東京：日本放送出版協会、昭和49年（1974）

『尺八の種類と歴史』 [季刊邦楽] 5号、東京：邦楽社、昭和50年（1975）
『尺八諸曲の流祖をたずねる』 [季刊邦楽] 10号、東京：邦楽社、昭和52年（1977）
『普化尺八研究の現状と課題』 [音楽]、大阪芸術大学紀要、昭和52年（1977）
『尺八曲の「すがかき」』 [季刊邦楽] 21号、東京：邦楽社、昭和54年（1979）
『尺八古典本曲「松嶋軽鈴鈴」考』 [音楽家文化財調査報告書] 第8集、昭和57年（1982）
『尺八古典本曲の伝承考察－レパートリーの形成と変容』 [諸民族の音 (小泉文夫先生追悼論文集)] [編集委員会 (編)］ 東京：音楽之友社、昭和61年（1986）
『天吹の音楽学的研究』 [天吹] [天吹同好会 (編)］ 東京：天吹同好会、昭和61年（1986）
『尺八の構造について』 [安藤由典・月溪恒子・前田雅一 (共著)] [音楽と音楽学 (服部幸三先生還暦記念論文集)] [角倉一朗・高野紀子・東川清一郎 (編)] 東京：音楽之友社、昭和61年（1986）
『普化尺八の拡散と交流』 [岩波講座 日本の音楽 - アジアの音楽 (3) 伝播と変容] [渡辺恒昭・大村善治・山口修・横道万里雄 (編)] 東京：岩波書店、昭和63年（1988）
『海を二度わたった日本の古番』 [中村英彦・村上倫明 (共著)] [楽器のかたち展] (目録)、大阪：ベルギーフランドル博物館、昭和63年（1988）
『中國少数民族の音楽』 [月溪恒子・杜亞雄・陳錦達 (共著)] [岩波講座 日本の音楽 - アジアの音楽 (別巻1 手引と資料) ] [渡辺恒昭・権田隆雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道万里雄 (編)] 東京：岩波書店、平成1年（1989）
『尺八家系譜』 [日本音楽大事典] [平野健次・上井裕雄・渡辺恒昭 (監) (付録) (編) 東京：平凡社、平成1年（1989）
『うたう中国少数民族の過去と現在』 [音楽]、大阪芸術大学紀要、昭和64年（1989）
『出雲路の調べー木幡家旧蔵尺八・雅楽史料調査記』 [季刊邦楽] 62号、東京：邦楽社、平成2年（1990）
『音楽のエスニシティ』 [音は生きている (芸術学フォーラム 6)] [谷村晃・山口修・細河也 (編)］ 東京：勁草書房、平成3年（1991）


“Simplicity as complexity: technicalities and aesthetics of Japanese musical instruments and music”，[Simura, Satoshi; Tukitani, Tuneko; Seyama, Tōru;
ヤマグチ、オサム（編著） Proceedings of the International Computer Music Conference 1993、平成5年（1993）
「集大成『鶴の巣籠』『邦楽ジャーナル』101号、東京:邦楽ジャーナル、平成7年（1995）
「尺八伝承者の伝承されるとき」『音の今昔』 [長塚哲男・山口修 (編)] 東京:弘文堂、平成8年（1996）
「Techniques of Making the Taiko (Drums)」 [中村章子、津村、里、長谷川 (共著)、Dieter Krickeberg (ed.)] Nürnberg: Verlag des Germanischen Nationalmuseums、平成8年（1996）
「『阿字観』の秘め」 [邦楽ジャーナル] 113号、東京:邦楽ジャーナル、平成8年（1996）
「吉川美恵監修『塙流尺八本曲指南』」 [図解資料録] 「塙流尺八集 古典尺八及び三曲に関する小論集」、[吉川美恵編] 東洋音楽研究 61号、東洋音楽学会、平成8年（1996）
「東洋音楽のまもなく やり 12」 35号 135号号に毎月連載、平成10号号（1998〜2000）
「書評:『日本の語り物 - 口頭性・構造・象徴』『音楽学』第49巻 (2)、東京:日本音楽学会、平成16年（2004）
「竹笛協長」(平成) 949号より奇数月に連載、京都: 財団法人日本山流尺八会、平成17〜22年（2005〜2010）
「尺八楽」「日本の伝統芸能講座 - 音楽 - [小島美子 (監)、国立劇場 (編)] 京都:演劇社、平成20年（2008）
「尺八本曲について」「尺八の会」国立劇場 第134回邦楽公演（9月23日）プログラム、東京:日本芸術文化振興会、平成22年（2010）（編集）その他、多くの辞典・事典項目、雑誌記事、論説等、多数執筆

●調査資料監修、解説等
「尺八楽 - 歴史と特質」「尺八1969」 [尺八レコードアルバム解説] 東京:日本クラウン (SWS-3)、昭和44年（1969）
「尺八楽の特色」[（邦楽大系4）著者:尺八、山尾、編者:成雄] [邦楽大系解説] [尺八レコードアルバム解説] 東京:筑摩書房
「曲目解説」「解説」 [吹氷] [竹保流にみる音楽尺八の系譜] [尺八レコードアルバム解説] 東京:日本コロムビア (KX-7001〜3)、昭和49年（1974）
「尺八本曲の『鶴の巣籠』」「胡弓 日本の擦弦楽器」 [LPレコードアルバム解説] 東京:日本フォノグラム (PH-8514〜18)
「古典本曲の音楽的特徴」「同名異曲と異名同曲 - 『三谷』『巣籠』『鶴』『さし』をめぐって」 [古代日本本曲の集大成者 神知道の尺八] [上参楽遊楽 (監) 東京: 日立 (GM-6005〜10)、昭和55年（1980）
「神知道の尺八譜」「月弦伝子・上参楽遊楽 (共著)」[上参楽遊楽 (監) 昭和55年（1980）(前揭書)
「尺八流錦風流について」「曲目解説」「酒井松道 竹を吹く 第二集」[尺八流錦風流尺八本曲全集] 大阪:京楽版、平成2年（1990）
「集大成 [秘譜] 鶴の巣籠」 [ビデオ・テープVHS] [月弦伝子 (監) 東京: オフィス・サウンドボット、平成7年（1995）
「阿字観」「薩楽」の秘め」 [ビデオ・テープVHS] [月弦伝子 (監) 東京: オフィス・サウンドボット、平成8年（1996）
「酒井松道 『鶴の巣籠』 五懸」 [監修・解説] 東京: コジマ録音 (EBISU-12)、平成18年（2006）（平成23年6月 志村哲 編集）

92